

平成24年度

(2012年度)

大学院人間文化学研究科（博士後期課程）

学生募集要項

日程表

項目	日程
出願期間	平成24年1月23日(月)～1月30日(月)
試験日	平成24年2月16日(木)
合格発表	平成24年2月27日(月)



公立大学法人

滋賀県立大学

THE UNIVERSITY OF SHIGA PREFECTURE

出願にあたっての個人情報の取り扱いについては、下記のとおりとします。

本学が保有する個人情報は、「滋賀県個人情報保護条例」ならびに「公立大学法人滋賀県立大学の保有する個人情報の保護等に関する規程」等により関係法令を遵守し、出願時に大学が取得した氏名、住所その他の個人情報は、下記の目的以外には利用いたしません。

- ①入学者選抜（出願処理、受験票発送、試験実施、成績処理等）、合格通知、入学手続案内、入学者選抜方法の調査・研究等の入試事務および付随する業務
- ②合格者のみ入学に伴う教務事務（学籍、修学指導等）、学生支援事務（健康管理、奨学金申請、後援会等）、授業料等の収納事務および付随する業務

また、上記事務処理の一部を外部に委託し、個人情報を受託業者に提供した場合は、関係法令等により、個人情報の漏えい、滅失またはき損の防止、その他個人情報の適切な管理に必要な措置に万全を期します。

[注意]

- ・問い合わせがあっても、本人以外には志願者の氏名・住所その他の個人情報は一切お知らせできません。
- ・駅、バス停、大学周辺で合否連絡・下宿案内等と称して個人情報を収集していることがありますが、本学ではそのような行為は一切行っていないので注意してください。

目 次

I 人間文化学研究科の概要および入学者の受入方針	
1. 研究科の構成	1
2. 教育研究の特色	2
3. 入学者の受入方針（アドミッション・ポリシー）	2
II 入学者選抜について	
1. 専攻別募集人員	4
2. 出願資格	4
3. 選抜方法および試験日程等	5
4. 出願書類	6
（別表）研究調書等	7
5. 出願手続	8
6. 合格発表	8
7. 注意事項	8
III 入学手続、初年度納付金	
1. 入学手続	9
2. 初年度納付金	9
IV 講義等の内容、担当教員および研究内容	
1. 講義等の内容	10
2. 担当教員および研究内容	12

I 人間文化学研究科の概要および入学者の受入方針

現代社会では、高度な科学技術の発達によって物質的豊かさが満たされてきた反面、精神的豊かさが失われ、さらに物質的豊かさの内実も必ずしも健康で安全な生活を保障するものとはいえない。

そこで、物心共に豊かな社会を実現するために、伝統文化の再生、新たな文化と生活環境の創造が強く求められている。

このため、人間文化学研究科では、さまざまな地域社会の文化・社会環境および生活空間・生活材・人間関係を人文・社会科学と自然科学の双方から多面的に研究し、それらを総合的に検討する人材を育成し、より高度な学術研究と教育を推進するため、博士前期（修士）課程を引き継いで、本研究科博士後期課程に地域文化学専攻と生活文化学専攻の2専攻を設置している。

1. 研究科の構成

(1) 地域文化学専攻

本専攻においては、新しい時代に適合する地域社会はいかにあるべきかを考える教育研究を展開する。時代は変わりつつある。グローバル化が進む一方で、逆に地方主権の必要が説かれている。こうした難しい状況のなかで地域社会はどうあるべきかを考えることが本専攻の目標である。この目標のために本専攻には、日本・地域文化論研究部門、アジア・地域文化論研究部門、考現学・保存修景論研究部門を置く。

日本・地域文化論研究部門では、近江を中心に据えながら日本の文化や社会についての教育研究を行う。琵琶湖を擁した近江は文化の通路としての普遍性と地域の独自性を兼ね備えているが、この関係の解明を中心に据える。

アジア・地域文化論研究部門では、上記の近江と日本の特質をアジア的な規模で解明することを目的としている。中国、朝鮮（韓半島）、モンゴルなどの近隣諸地域を主たる比較の対象とする。

考現学・保存修景論研究部門では、考現学的考察、地域展開論的手法を通じて地域の歴史的環境と文化・社会との関係を明らかにする。また、その保存と地域展開の方法を探る教育研究を行う。

(2) 生活文化学専攻

本専攻においては、生活科学、人間科学の立場からライフスタイルと人間関係の問題を対象とする高度な教育研究を行う。すなわち、人間のライフサイクルの全体を通して、生活と社会との関わりを、生活デザイン、健康と栄養、人間関係の諸領域にわたって綿密に再検討し、真に充足された健康で快適な生活文化と生活環境を見いだすための教育研究を行う。このため、本専攻内に、生活デザイン論研究部門、健康栄養論研究部門、人間関係論研究部門を置く。

生活デザイン論研究部門は、住環境をはじめ生活環境全般にわたって、健全なライフスタイルと生活環境をデザインすることを目的とする教育研究を、学際的な立場から展開し、新しい

生活デザインの構築に努める。

健康栄養論研究部門は、健康と栄養に関する基礎から応用までの栄養科学にかかわる諸問題に関して、幅広い視点から理論的・実証的研究を行う。健康と栄養に関する生活上の知恵や慣習を科学的にとらえるなど、総合的視点から問題に取り組み、健康生活の実現を目指す教育研究を行う。

人間関係論研究部門は、社会的に望まれる生活環境の中での人間関係の構造的・機能的特性を解明するために、人間の発達と形成、言語やコミュニケーションのメカニズム、人間行動の機構、現代社会の人間関係に関し、教育学、心理学、社会学、コミュニケーション論などの立場から学際的な教育研究を行う。

2. 教育研究の特色

- (1) 本研究科博士後期課程は、それぞれの専門部門の研究を進めるとともに、「地域と生活に根ざした視点」を共有し、研究部門間の教育研究にわたる学際的連携を進めるとともに、学内外の共同研究プロジェクトに参加し、総合的な研究を展開する。とくに地域文化学専攻では、環琵琶湖からアジアに広がる地域学を学内外と共同で学際的に展開する。
- (2) 学際性と独創性を高めるために、学生は他研究科教員を含む教員、協力関係にある研究機関のスタッフなどの指導を受けることができる。ただし、最終的な指導責任は学生の所属する専攻の主任指導教員が負う。
- (3) 大学院教育に広がりを持たせるため、外国人留学生の受入れ、外国を含む他大学院との連携をも進める。

3. 入学者の受入方針（アドミッション・ポリシー）

（地域文化学専攻）

それまでの大学、大学院における研究を踏まえた上で、さらに研鑽し、博士論文として結実させる能力、識見を有した学生を求める。

（生活文化学専攻）

生活科学、人間科学の立場からライフスタイルと人間関係の問題を対象とする高度な教育研究を行う。すなわち、人間のライフサイクル全体を通して、生活と社会との関わりを、生活デザイン、健康と栄養、人間関係の諸領域にわたって綿密に再検討し、真に充足された健康で快適な生活文化と生活環境を見いだすための教育研究を行う。このために、生活デザイン論、健康栄養論、人間関係論の3研究部門それぞれにおいて、必要とされる当該分野の基礎知識、思

考力、語学力および研究資質を有する学生を求める。

生活デザイン論研究部門では、生活環境とその形成について学際的な立場から探究し、新たな生活デザイン論の構築をめざす教育研究を展開する。このために、デザインの少なくとも一領域に関する専門的知識を持ち、研究の能力と実績を有する学生を求める。

健康栄養論研究部門では、人が健康で豊かな生活を営むために、食品機能や生体における栄養素の代謝や生体利用、運動生理の仕組みを探究し、疾病の予防や治療、健康の維持・増進を目的とした実践的な教育研究を展開している。このことから、健康・栄養に関する十分な知識、実践の科学としての応用力と思考力並びに英語読解力（留学生の場合は日本語能力）を持ち、食生活を通じた健康に関する栄養学および運動生理学を探究しようとする学生を求める。

人間関係論研究部門では、人間関係の構造的・機能的特性を解明すべく、人間の発達と形成、言語やコミュニケーションのメカニズム、人間行動の機構、現代社会の人間関係に関し、心理学、社会学、教育学、コミュニケーション論・比較文化論など多様な立場から学際的な教育研究を行っている。このために、当該分野に関する専門的知識と研究資質を有する学生を求める。

Ⅱ 入学者選抜について

1. 専攻別募集人員

専攻	研究部門	募集人員※
地域文化学専攻	日本・地域文化論研究部門 アジア・地域文化論研究部門 考現学・保存修景論研究部門	3人
生活文化学専攻	生活デザイン論研究部門 健康栄養論研究部門 人間関係論研究部門	2人

※募集において、「一般」・「社会人」・「外国人」の区別はしません。

2. 出願資格

- (1) 修士の学位を有する者および平成24年3月31日までに取得見込みの者(注1)(注2)
- (2) 外国において、修士の学位に相当する学位を授与された者および平成24年3月31日までに授与される見込みのある者(注1)(注2)
- (3) 外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位に相当する学位を授与された者および平成24年3月31日までに授与される見込みのある者(注1)(注2)
- (4) 我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位または専門職学位に相当する学位を授与された者および平成24年3月修了見込みの者
- (5) 文部科学大臣の指定した者〔平成元年文部省告示第118号〕(注3)
- (6) 本研究科において、個別の入学資格審査により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者で、平成24年3月31日までに24歳に達するもの(注4)
- (7) 外国人の場合は、上記(1)～(6)のいずれかの資格を持ち、かつ、日本語を理解できる者

(注1) 修士の学位の種類は問いません。

(注2) 出願資格(1)、(2)、(3)のうち、修士の学位(または修士に相当する学位)を取得見込みで出願する場合、平成24年3月31日までに取得できないことが確定した場合には、合格しても入学資格を失うこととなります。

(注3) 出願資格(5)に該当する者とは、次の①または②に該当し、本研究科において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者をいいます。

①大学を卒業し、大学、研究所等において、2年以上研究に従事した者

②外国において学校教育における16年の課程を修了した後、または外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、2年以上研究に従事した者

(注4) 出願資格(6)に該当する者には、大学を卒業した者のほか、短期大学、高等専門学校、専修学校、

各種学校の卒業者や外国大学日本校、外国人学校等の修了者等も含まれる。

出願資格(5)、(6)で出願しようとする者は、出願資格の事前審査を行うので、あらかじめ本学教務グループへ申し出て、次の書類を提出してください。

提出書類：①出願資格認定申請書(様式I票)

②出願書類一式(F票および入学検定料を除く。)

提出先等：提出期間 平成24年1月6日(金)～1月13日(金)まで

提出場所 滋賀県立大学教務グループ

審査の結果は、平成24年1月20日(金)までに本人あてに通知しますので、出願資格を認定された者は、出願書類の受付期間内にF票および入学検定料を追加提出・振込してください。

※持参による受付時間は、午前9時から午後5時までとします。(土日祝日を除く。)

3. 選抜方法および試験日程等

修士論文等の審査および面接の結果を総合して選考します。

試 験 日：平成24年2月16日(木)

試 験 場：本学人間文化学部棟

専 攻	試験科目	試験時間	試 験 の 内 容
地 域 文 化 学 専 攻	面 接	10:00～	修士学位論文および研究調書等に基づいた専門に関する設問を含む。
生 活 文 化 学 専 攻	面 接	10:00～	専門に関する設問を含む。

4. 出願書類

出願に必要な書類		作成方法
A票	入学(進学)志願票	本学所定の様式によること。 ※学業成績証明書等に記載された氏名と異なる場合は、氏名を変更したことを証明する書類をあわせて提出してください。
B票	履 歴 書	本学所定の様式によること。
	修 士 学 位 論 文	修士の学位論文またはこれに代わるものを1部 ※
	研 究 調 書 等	別表(p. 7)に記載の「研究・実務経験調書(J-1票)」、「業績一覧書(J-2票)および論文等」、「研究計画書(J-3票)」
	大学院学業成績証明書	◆出願資格(1)(2)(3)(4)該当者◆ 出身大学院の学長または研究科長が作成し、厳封したもの [ただし、本学を平成23年度に修了見込で進学を志望する者は提出不要]
	大学等学業成績証明書	◆出願資格(5)(6)該当者◆ 最終学歴の大学等の長が作成し、厳封したもの
	修士(博士前期)課程修了(見込)証明書	◆出願資格(1)(2)(3)(4)該当者◆ 出身大学院所定のもの [ただし、本学を平成23年度に修了見込で進学を志望する者は提出不要]
	大学等卒業証明書	◆出願資格(5)(6)該当者◆ 最終学歴の大学等所定のもの
	学位授与証明書または学位授与申請に係る証明書	学校教育法第104条第4項の規定による学位授与の場合に提出する。
	外国人登録原票記載事項証明書	市区町村長が発行したもので、在留資格を明記したもの
C票	住 所 票	可否の通知書等送付先の住所を記入すること。
D票	受 験 票	縦4cm×横3cmの写真(上半身、無帽、正面向き、背景なし、出願前3か月以内に撮影したもの)を写真貼付欄に貼付すること(同じ写真であること)。
E票	写 真 票	
F票	入学検定料振込確認票	所定欄に受付印を受けた「入学検定料振込金受領証明書」を貼付すること。 ※日本に居住していない者にとっては、払込方法を指示するので、事前にインターネットのE-mailまたは郵便で教務グループまで問い合わせること。
G票	受験票返送用封筒	受験票返送先の住所、氏名、郵便番号を明記し、80円分の切手を貼付すること。 ※日本に居住していない者にとっては、航空便書状料金(20g)に速達料金を加えた「国際返信用切手券」を同封すること。
H票	出願書類提出用封筒	「志望研究科・専攻・部門」欄、「志願者」欄に必要な事項を記入すること。
I票	出願資格認定申請書	出願資格(5)、(6)で出願しようとする者は、本様式に必要な事項を記入し、出願に先立って所定の期間内に提出すること
入学検定料 30,000円 ・入学検定料は本学所定の「入学検定料振込依頼書」により、出願受付期間の1週間前から出願受付最終日までの間に、指定の金融機関に振り込んでください。なお、ATM(現金自動支払機)は利用できません。 ・振り込み後、「入学検定料振込金受取書」および「入学検定料振込金受領証明書」を受け取り、受付印があることを確認してください。なお、受付印を受けた「入学検定料振込金受領証明書」は、入学検定料振込確認票の所定欄に貼付してください。		

<地域文化学専攻の場合>内容は、志望専門分野に関するものであること。修士学位論文が志望専門分野に関わらない内容の場合は、これに代わる志望専門分野に関する論文を提出することとし、いずれの場合も日本語で、字数は24000字以上とする。

(注1) A票～I票および「入学検定料振込依頼書」の各書類は、本冊子に添付されています。

(注2) 英語以外の外国語で書かれた書類については、日本語訳または英語訳を添付してください。

(別 表)

研 究 調 書 等

研 究 調 書 等	摘 要
<p>1 研究・実務経験調書(J-1票)</p> <p>これまでの研究の概要または実務経験・職務上の業績をまとめたもの。</p> <p>研究業績、実務経験・職務上の業績の両方にわたってもよい。</p>	<p>和文2000字以内、あるいは英文600語以内 (A4縦長・横書き)</p>
<p>2 業績一覧書(J-2票)および論文等</p> <p>学位論文・学術論文・学会発表・特許などの研究業績、および製品開発・システム開発・プログラム開発・書誌作成・プロジェクトへの参加など実務上の業績のリスト(共同開発の場合には何を分担したかを付記すること)。</p> <p>学位論文および主要学術論文は、別刷(または写し)を各1部添付すること。</p>	<p>学術論文については、著者名(共著者名を含む)、論文の表題、学協会誌名、巻、最初と最後のページ、発表年月(西暦)を記入すること。英語以外の外国語で書かれた論文については、日本語または英語の概要を付けること。(別紙[A4縦長・横書き]の添付可)</p> <p>学会発表については、発表者名(共同発表者名を含む)、発表の表題、発表学会名、発表年月(西暦)を記入すること。</p> <p>プロジェクトについては、プロジェクト名、期間、プロジェクトの概要、自分の役割を記入すること。</p>
<p>3 研究計画書(J-3票)</p> <p>研究を希望する研究テーマについて、研究計画をまとめたもの。</p>	<p><地域文化学専攻></p> <p>和文あるいは英文で4ページ程度(A4縦長・横置き)。</p> <p>なお、次の項目にしたがって具体的に書くこと。</p> <p>(1)研究の背景 (2)研究の目的、内容 (3)研究の特色、独創的な点 (4)年次計画(1年目、2年目、3年目)</p> <p><生活文化学専攻></p> <p>和文2000字以内、あるいは英文600語以内 (A4縦長・横書き)</p>

(注) J-1~3票の各書類は、本冊子に添付されています。

5. 出願手続

(1) 受付期間 平成24年1月23日(月)～1月30日(月) まで(必着)

出願にあたっては出願書類提出用封筒[H票]を用い、郵送または直接持参してください。

なお、郵送による場合は必ず書留速達扱いとし、受付期間最終日必着とします。また、持参による受付時間は午前9時から午後5時までとします。(土日祝日を除く。)

(2) 願書提出先 〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町2500

滋賀県立大学 教務グループ ☎0749-28-8216・8217

E-mail:nyushi@office.usp.ac.jp

※日本に在留していない者で、受験のための在留資格「短期滞在」の取得に日時を要する場合は、事前に上記まで相談してください。

6. 合格発表

平成24年2月27日(月) 午前9時

事務局前の掲示板に合格者の受験番号を掲示するとともに、本人に合否の通知書を送付します。

なお、電話等による合否の問い合わせには応じません。

7. 注意事項

(1) 一度受付をした出願書類および入学検定料は、理由のいかんを問わず返還しません。

(2) 出願期間を過ぎて到着したものは受け付けませんので、郵送に関しては所要日数を十分に考慮して発送してください。

(3) 入学を許可した後であっても、出願書類の記載と相違する事実が発見された場合には、入学を取り消すことがあります。

(4) 出願受付後には出願事項の変更は認めません。ただし、氏名、住所、電話番号に変更があった場合には、下記まで連絡してください。

(5) 心身に障害(学校教育法施行令第22条の3に定める障害の程度)がある入学志願者は、受験上および修学上特別の配慮を必要とすることがありますので、平成24年1月13日(金)午後5時までに連絡し、相談してください。

(6) 外国人は、入学時まで、「出入国管理及び難民認定法(昭和26年政令第319号)」において大学院入学に支障のない在留資格の取得が必要となります。在留資格の取得ができない場合は、入学が許可されません。

(7) その他不明な点は、下記まで問い合わせてください。

《問い合わせ先》

〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町2500

滋賀県立大学 教務グループ

☎0749-28-8216・8217

E-mail:nyushi@office.usp.ac.jp

Ⅲ 入学手続、初年度納付金

1. 入学手続

(1) 入学手続期間 平成24年3月13日(火)～3月19日(月)まで(必着)

入学手続に必要な書類は、合格通知書に同封して郵送します。

(2) 入学手続先 〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町2500

滋賀県立大学 教務グループ (☎0749-28-8216・8217)

(3) 入学手続上の注意事項

- ① 期間内に手続を完了しなかった者については、入学を辞退したものと取り扱います。
- ② 一度受付をした入学手続書類および入学料は、理由のいかんを問わず返還しません。

2. 初年度納付金

(1) 入学料 ①滋賀県内に住所を有する者 282,000円

②その他の者 423,000円

(注1) 滋賀県内に住所を有する者とは、次のいずれかに該当する者のことであり、「住民票(外国人登録原票)記載事項証明書」の提出が必要です。

ア 入学の日の1年前(平成23年4月1日)から引き続き滋賀県内に住所を有する者

イ 入学の日の1年前(平成23年4月1日)から引き続き滋賀県内に配偶者または1親等の親族(生計を一にする者に限る)が住所を有する者

(注2) 本学大学院博士前期課程修了見込みの者で、引き続き博士後期課程に進学するものについては、入学料は不要です。

(2) 授業料 ① 年額535,800円

(平成23年度の額であり、改定されることがあります。なお、在学中に授業料が改定された場合には、改定後の授業料が適用されます。)

② 納付方法 前期(納付期限4月末日)、後期(同10月末日)の2回の分納です。

IV 講義等の内容、担当教員および研究内容

1. 講義等の内容（変更される場合もある。）

(1) 地域文化学専攻博士後期課程

授業科目名	講 義 等 の 内 容
日本・地域文化論 特別演習	専門分野・隣接分野について、日本の各地域・各時代を扱った研究論文等を精読し、基礎理論、方法論および先行研究の成果に関する理解を深める。
日本・地域文化論 特別研究	日本における地域文化の領域について、歴史的・国際的視点に立脚し、理論的・応用的な研究課題を設定させ、分析方法、調査方法、研究成果のまとめ方などについて高度な指導を行う。
アジア・地域文化論 特別演習	専攻する地域（アジア）・時代の論文や調査報告書を精読する。また、現地調査を実施させ、その際に作成したフィールドノートをもとに討議する。
アジア・地域文化論 特別研究	現地調査と文字資料、歴代の史料などを総合することで、アジアの地域文化の形成、発展、現状を分析し、実態解明を図る。また、その成果を高めるべく、比較研究を進めさせる。
考現学・保存修景論 特別演習	考現学、保存修景論、地域展開論などの分野の論文を読み、また、これらの分野に応じた現地調査・実習も行う。さらに、その成果を素材として討議を行う。
考現学・保存修景論 特別研究	地域文化の歴史的展開、現状、展望（将来的に想定される意味）を明らかにすることはもちろん、望ましい伝統文化については、その保存修景の方策を考察する。
研究方法特論	学生が幅広い視野の元に研究をすすめていけるよう、関連する研究領域の研究方法について、主たる指導教員以外からも指導を受けられる機会をつくる。学生は研究テーマの追求にあたって、それに関連する領域を担当する複数の教員（主たる指導教員以外の教員）の研究室を訪問し、研究テーマ、研究方法、研究倫理、そのほか研究者として必要な技法や理論的知識について個別指導を受ける。
リサーチ・ワークショップ	学生の研究を個々の専門分野の垣根を越えて組織的・多面的に指導・支援するために、履修者全員と指導担当教員全員が出席するワークショップを年2回ほど開催する。履修者は事前に報告要旨を提出し、その上で自らの研究計画・研究報告を発表し、質疑を受ける。ワークショップ終了後、質疑応答の結果を踏まえて改善した研究計画書および論文執筆計画書をまとめる。

(2) 生活文化学専攻博士後期課程

授業科目名	講 義 等 の 内 容
生活デザイン論 特別演習	生活デザイン論のなかでインテリア、住居、都市・地域を含む集住デザイン、道具デザイン、服飾デザインの各分野において、最新の研究成果である各種文献を読み、紹介し、そして討論し、それらの分野の知見と研究動向を把握させ、研究方法を更に修得させ、問題の所在や新たな研究の方向を洞察する能力を養成する。
生活デザイン論 特別研究	住居デザイン、都市・地域デザイン、道具デザインおよび服飾デザインなど生活デザインの分野における理論的分野並びにこれらの横断的な分野に関するテーマについて、複数の教員によって指導し、その成果を博士論文にまとめさせる。
健康栄養論 特別演習	健康栄養論に関する知見の進歩・国際比較を考慮に入れて、最新の研究論文・総説を紹介させ、質問と討論を行う。また、研究動向や方法に関する情報を深め、研究の方向性を洞察できる能力を学習させ、研究者として独り立ちできる能力を身につけさせる。
健康栄養論 特別研究	生化学、栄養学、生理学などの幅広い健康・栄養科学領域から、食生活を通じた健康に関する諸問題を総合的並びに学際的に促えさせる。これらの健康栄養に関する諸研究分野から、学生が選択したテーマについて複数の教員によって研究指導を行い、その成果を博士論文にまとめさせる。
人間関係論 特別演習	人間関係論の研究部門に関する諸問題を演習形式で指導する。文献研究、行動観察、心理実験、社会調査などによって、学生各自が研究テーマを追究し、同時にその方法論について学べるよう指導する。
人間関係論 特別研究	人間関係論の立場から人間関係の基本的構造とその機能的特性を追究し、社会における望ましい人間関係のあり方を学際的に解明するための研究指導を行う。各自が研究テーマを設定し、それぞれの課題について理論的・実証的に研究した成果を博士論文にまとめるよう指導する。
研究方法特論	学生が幅広い視野の元に研究をすすめていけるよう、関連する研究領域の研究方法について、主たる指導教員以外からも指導を受けられる機会をつくる。学生は研究テーマの追求にあたって、それに関連する領域を担当する複数の教員（主たる指導教員以外の教員）の研究室を訪問し、研究テーマ、研究方法、研究倫理、そのほか研究者として必要な技法や理論的知識について個別指導を受ける。
リサーチ・ワークショップ (RWS)	学生の研究を個々の専門分野の垣根を越えて組織的・多面的に指導・支援するために、履修者全員と指導担当教員全員が出席するワークショップを年2回ほど開催する。履修者は事前に報告要旨を提出し、その上で自らの研究計画・研究報告を発表し、質疑を受ける。ワークショップ終了後、質疑応答の結果を踏まえて改善した研究計画書および論文執筆計画書をまとめる。

2. 担当教員および研究内容

(1) 地域文化学専攻博士後期課程

【日本・地域文化論研究部門】

職名	担当教員	専門分野	担当科目 (前期課程)	研究内容
教授	水野 章二 ミズノ ショウジ	日本中世史	環琵琶湖地域論A 環琵琶湖地域論B	社会史などの新しい研究動向や歴史地理学・考古学などの著しい進展という研究状況の中で、中世村落を民衆の生産・生活の場ととらえて村落領域論を提起し、空間構造という視点から中世村落論を構想した。また大規模開発などに伴う歴史的景観・環境の破壊に対応して、消滅しつつある用水系・地名などの現況調査を実施し、文献史料だけにとどまらない、総合的な荘園・村落像の構築をめざした。主著『日本中世の村落と荘園制』
教授	市川 秀之 イチカワ ヒロユキ	日本民俗学	日本生活文化論	近畿地方の村落や都市をフィールドとした歴史民俗学的な研究を行っている。主たる研究テーマは村落空間論、農業水利と村落社会との関係、小都市における民俗文化、近世後期以降の民俗の創出と改変など。既存の民俗学的分類でいえば村制、生業、墓制などの領域を中心とした研究であるが、フィールドワークを通して特定地域における民俗の全体像に迫ることを目的としている。また最近では民俗学の「学」としての形成過程にも関心を持ち、宮座や墓制などの分野で研究史の見直しを行っている。
教授	京楽 真帆子 キョウラク マホコ	日本古代史	女性史・ジェンダー論A 女性史・ジェンダー論B	平安時代の平安京を主たるフィールドとして、貴族社会の生活を研究している。貴族の交友関係、居住形態、その住居の構造などを日本文学・考古学などの他分野の成果も取り入れながら分析している。さらに、平安期の家族・親族構造や婚姻・出産儀礼についての分析など、女性史・ジェンダー史から平安社会を解く研究も行っている。
准教授	中井 均 ナカイ ヒトシ	日本考古学	日本考古学A 日本考古学B	考古学、とりわけ中世考古学を研究している。考古学は時代を限定するものではなく、歴史時代にもきわめて有効である。研究の中心は城館遺跡である。中世の日本列島には数多くの城館が築かれており、中世を考えるうえでは最も重要な遺跡である。この城館遺跡を分布や規模をはじめ、遺構からは、石垣、礎石建物より、遺物からは陶磁器、土師器、瓦などより分析をおこなっている。また、最近では近世大名の墓所の構造に大名の権力構造が認められる点に関心を持っている。
准教授	亀井 若菜 カマイ ワカナ	日本美術史	美術史特論A 美術史特論B	中世の絵巻を主な研究対象としている。絵の中には、絵を作った人、作らせた人の願望や欲望、価値観が表されていると考え、絵の意味や機能を、絵が作られた社会的歴史的状況から考えている。特に女性や土地を描く絵を対象とし、それが誰の視線を通した表象であり、そこにどのような権力が作用しているのかを研究している。また日本美術史という学問・言説の体系の成り立ちやその語りに対しても考察を行っている。主著は『表象としての美術、言説としての美術史—將軍足利義晴と土佐光茂の絵巻』。
准教授	東 幸代 アズマ サチヨ	日本近世史	環琵琶湖地域論A 環琵琶湖地域論B	日本近世が現代日本の体質形成に大きな影響力をもったとする立場から、近世の生産・流通構造、支配構造、民衆生活等について検討している。特に、漁業を中心とする諸産業の史的特質や、琵琶湖などの自然を利用した幕藩領主層の民衆支配の特質に関心をもっている。また、地域に残る古文書の活用・保存にも強い関心がある。
准教授	塚本 礼仁 ツカモト レイジ	人文地理学 地域産業研究	地域産業論A 地域産業論B	主に農林水産物の「産地」を対象とし、形成プロセス、産地機能の維持基盤、成長・衰退の要因、変質の仕組みを探るとともに、持続的発展の可能性についても考察している。具体的な研究素材は、日本人の独特かつ伝統的な魚食文化のもとで食されてきたウナギを・・作る養鰻産地であり①生産者・組合・流通業者・加工業者などが形作る「産地社会」の実態をフィールドワークによって描き出すこと、②フードシステム（「食」をめぐる社会・経済・政治・文化的な環境）と水産養殖産地との連結構造を解明することを重視してきた。また今後は、琵琶湖漁業・養殖業や滋賀県の淡水魚食文化についても分析を進めたい。
講師	武田 俊輔 タケダ シュンスケ	社会学 文化研究	環琵琶湖地域論A 環琵琶湖地域論B 社会学特論A 社会学特論B	近現代日本におけるナショナリズム・メディア・文化について、社会学の立場から研究を行っている。具体的には、①地域社会における民謡や民俗芸能が地域社会の近代化や観光、地域おこしといった文脈の中で変容していくプロセスを分析することを通じて、郷土意識と国民意識およびその両者の関係性の変容についての研究、②近現代日本における印刷メディア・音声メディアとそれにとまなう音声性／書記性をめぐるメディアの編成に関する研究、③近現代日本におけるメディアと公共性に関する研究を行っている。

【アジア・地域文化論研究部門】

職名	担当教員	専門分野	担当科目 (前期課程)	研究内容
教授	アライ トシアキ 荒井 利明	現代中国 現代東アジア	現代中国特論A 現代中国特論B	現代中国および現代東アジアを研究対象としているが、問題意識は主として二つ。「中国はどこへ行くのか」と「日中関係はどうなるのか」である。前者においては、中国を政治、経済、社会、外交など、さまざまな面から総合的にとらえたいと思っているが、一三億の国民一人ひとりの生活と意識にも迫りたいと考えている。後者では、両国の関係を単なる二国間関係ではなく、東アジアという地域の中でとらえたいと思っている。
教授	タナカ トシアキ 田中 俊明	朝鮮古代史 古代日朝関係史	北東アジア地域史A 朝鮮史特論B	朝鮮古代史を全般的に対象にしているが、特に現在のテーマは朝鮮三国の都城制、朝鮮三国の国家構造、領土国家への展開と支配、朝鮮における古代国家の成立、加耶の政治過程、金石文資料の再検討、『三国史記』成立過程の検討、『魏志』をはじめとする中国正史東夷伝の研究、古代の日朝関係史などである。
教授	サダモリ ヒデキ 定森 秀夫	東アジア考古学 東アジア交流史	日本考古学A 日本考古学B アジア考古学A アジア考古学B	広く東アジア（中国・朝鮮・日本）の考古学・交流史を学んでいるが、主な研究対象は朝鮮三国時代の陶質土器である。陶質土器は地域性・時代性が非常に強い。その陶質土器の考古学的研究を通して、朝鮮三国時代の社会的・政治的動態の解明を進めている。一方、日本でも陶質土器が出土している、朝鮮三国のどの地域の土器か分かるようになってきた。朝鮮陶質土器を含めた多種多様な渡来系文物び考古学的検討から、古代日本における渡来人・渡来文化の研究を進めている。
教授	アサセ ジョウ 棚瀬 慈郎	チベット学 文化人類学	トランス・ヒマラヤ文化論	最近、主に以下の二つのテーマについて研究している。 1. ヒマラヤ地域におけるチベット系社会についての人類学的研究－インドのH. P. 州ラホール渓谷において、長期的なフィールドワークをおこなっている。 2. チベットの宗教文化の研究－チベット仏教の、特にニマ派と呼ばれる宗派に属するヨーガ行者達の行動と、その社会的影響に関する研究。
准教授	ボルジギン・ブレンサイ ン	社会史 中国東北・内モンゴル地域論	北東アジア地域史B モンゴル・ディアスポラ論A モンゴル・ディアスポラ論B	主な研究内容は以下の通りである。 1. 基本的にはモンゴル全体を視野に入れているが、特に内モンゴル若しくは中国領モンゴル族の歴史と社会変遷を中心としている。それに関連して中国の少数民族問題も視野に入れて研究している。 2. 清末以後における中国東北地域の諸民族の歴史と社会問題、又は満州国期前後の問題にも取り組んでいる。 3. 研究方法は史(資)料の収集、分析と対象地域におけるフィールドワークの結果を結合させることである。
講師	シマムラ イツベ 島村 一平	文化人類学 モンゴル研究	モンゴル・ディアスポラ論A モンゴル・ディアスポラ論B	モンゴルにおけるシャーマニズムとエスニシティの研究 私は、シャーマニズムの活性化を切り口にして遊牧社会におけるエスニシティ研究に従事してきたが、中国やロシアに居住するモンゴル人遊牧社会の研究へと発展させていきたいと考えている。とくにモンゴル系のエスニック集団の中には国境によって隔たれ離散している集団(ディアスポラ)も少なくない。今日、国境を越えたエスニックな紛争が世界各地で勃発していることを考慮するならば、重要な研究課題であるといえる。

【考現学・保存修景論研究部門】

職名	担当教員	専門分野	担当科目 (前期課程)	研究内容
教授	クロダ スエヒサ 黒田 末壽	人類学 地域学	地域展開論A 地域展開論B Japanese Culture and Civilization	1. 人類社会の進化史の研究。狩猟採集社会と類人猿各種の社会との比較研究および古人類学の研究成果を総合して、人類社会の進化史を考究する。特に家族の出現、制度・所有といった人類社会特有の社会的機軸の成立過程に焦点をあてている。 2. 地域社会における生活技能の役割。特に農耕技術や農鍛冶による地域社会ネットワークの形成や身体感覚の共有化についての考究。
教授	ハマザキ カズシ 濱崎 一志	都市史 保存修景	アジア考古学A アジア考古学B 環琵琶湖保存修景計画論A 環琵琶湖保存修景計画論B 地域文化遺産調査・情報論	埋蔵文化財や伝統的建造物などの建築史・都市史的研究と、こうした地域文化財を活用した保存修景計画のあり方を研究している。時代が異なり多岐にわたる埋蔵文化財や、地域色豊かな伝統的建造物群、こうした地域文化財をはぐくんできた自然環境などを活かした地域計画や保存修景計画のあるべき姿を模索している。こうした計画の策定に、CADやGIS（地理情報システム）を導入し、文化財に最適な利用方法の検討を進めている。
助教	イシカワ シンジ 石川 慎治	保存修景 集落研究	日本生活文化論 環琵琶湖保存修景計画論A 環琵琶湖保存修景計画論B 地域文化遺産調査・情報論	伝統的な建造物などで構成される町なみや集落（伝統的建造物群保存地区や文化的景観など）に関する研究を行い、地域文化財としての町なみや集落景観における保全・継承のあり方について模索している。また、倒壊・解体していたり、絵図などの史料などでしか状況がわからないような現存しない建造物について、CADなどを用いながら復元・検討を行い、その建造物や周辺環境を含めた当時の歴史的景観を探っている。

(2) 生活文化学専攻博士後期課程

【生活デザイン論研究部門】

職名	担当教員	専門分野	担当科目 (前期課程)	研究内容
教授	道明美保子 ドウミョウ ミホコ	染色学 被服整理学	衣料素材・染色科学特論	天然染料の染着機構の解明とそれに裏付けられた新しい技法の展開により、染色の伝統と科学の谷間を埋めるための実験的研究を行っている。また、各種繊維に対する染色性等を調べることにより、繊維・染料としての展開のみならず、他の分野への適用のための基礎データの蓄積も行っている。近年は、「天然染料によるセルロース系繊維染色のシステム化」等の研究を進めている。
教授	面矢慎介 オモヤ シンスケ	道具学 考現学 デザイン史	道具デザイン特論 I	近代道具の発展過程に関するデザイン史的研究：従来のデザイン史は、特定の有名デザイナーの造形思想から製品のデザインを説明してきたが、20世紀以降の工業製品の大半は、利用可能な技術、製品化に関わる企業活動、流通・販売のシステム、モノを購買し使用する生活者の心理や行動などの諸要因の総和として成立している。このような視点から、近代道具におけるデザイン変化と背景要因の関係につき事例研究を進めている。
教授	印南比呂志 インナミ ヒロシ	プロダクト デザイン 製品計画 地場産業論	道具デザイン特論 II	複製産業技術としてのプロダクトデザインが社会に果たす役割を、日常生活のさまざまな現象から検証していく。地域産業という視点による、ものづくりを基本としたコミュニティづくり、街のアイデンティティ形成などの過程を、実際のデザイン開発事例をもとに比較、分析する。また、デザイナーという職能のモラルや社会貢献など、これからのデザインビジネスと地域産業、行政との関わりについても、フィールドワークやデザイン実践活動を通して研究する。年度ごとにテーマを選び、実務的観点から、調査、分析をおこなって、当該分野のデザインをめぐる現状の問題点を探り、その実践的解決策を共に考える。
准教授	宮本雅子 ミヤモト マサコ	住居学	室内環境計画特論	高齢社会における快適な居住環境を整えるための条件について調査および実験を行い、検討を進めている。主に、視環境に関わる実験的研究を行っており、「高齢社会における室内色彩計画に関する研究」「効果的な昼光利用に関する研究」などがある。また、「高齢者のための居住空間に関する研究」など実態と居住者の意識をとらえた研究も行っている。
准教授	森下あおい モリシタ アオイ	服飾デザイン 服飾造形学	服飾デザイン特論	服飾デザインは物的、用途的条件のほか、人間が生活していく中で多様な文化、社会的条件と人間の心の中に働く意識によって生み出されている。こうした服飾デザインのもつ特性に注目し、実験的に服飾デザインの構成要素を明らかにすることを試みながら、服飾と人間の間に介する感性特性の研究を行っている。
准教授	山根周 ヤマネ シユウ	地域生活空間計画論 アジア住居論 アジア都市論	住空間デザイン特論	地域の生態、社会、文化を基盤とした持続可能な生活空間計画のための方法論を検討する。具体的には、日本を含めたアジアのヴァナキュラーな住居の構成および集落や都市における集住形態を臨地調査によって明らかにすると共に、民族、宗教、コミュニティ、社会制度などの視点からそれらの構成原理を考察し、地域に固有な住まいのかたちを探る。地域的にはインド、パキスタンなど南アジア地域を中心として、イスラーム世界およびインドゥー世界における都市や住居の構成に関する研究や、インド洋海域世界における港市の構成に関する研究などをおこなう。

【健康栄養論研究部門】

職名	担当教員	専門分野	研究内容
教授	福井 富穂 フクイ トミホ	臨床栄養学	傷病者に対する栄養管理を目的とし、病院において外来患者、入院患者を対象に調査研究を進めている。消化器疾患や感染症などの急性期疾患時における栄養アセスメントに基づく栄養ケアプログラムの作成・実施とその有効性について、あるいは肥満、糖尿病、高血圧、脂質異常症、心疾患などの生活習慣病や肝臓、腎臓疾患などの慢性疾患罹患者に対する栄養食事指導（栄養ケアプログラム）の有用性など臨床栄養管理の効果判定方法などについて研究する。
教授	灘本 知憲 ナダモト トモノリ	食品栄養学	身近な食素材や野草などにまつわる生活の知恵、伝承を科学の目で再検証し、健康な暮らしに生かすことを目標として、次の2テーマに取り組んでいる。 ①食品の性と自律神経：漢方以来受け継がれている食品の性（体を暖めたり冷やす作用）の科学的実証と、ヒトの自律神経系への作用解明。 ②野草の消臭・抗菌作用：身近に自生する野草の伝承に基づく消臭・抗菌活性の検索と、有効成分の単離・構造決定。
教授	高山 博史 タカヤマ ヒロシ	臨床血液栄養学 止血血栓学	血栓症は栄養学とも関わりの深い糖尿病、脂質異常症、高血圧症、動脈硬化症などの生活習慣病の終末像であり、がんとならんで日本人の主要な死因の一つである。その病態と発症因子を明らかにする為に血小板形成機構の基礎的検討および栄養因子の影響を研究すると同時に、疾患モデル動物や疾患患者における血栓傾向を生じる病態の解析を行なう。それにより血栓症の発症過程の理解および栄養学的なアプローチを含めた予防に貢献することを目的とする。
教授	柴田 克己 シバタ カツミ	栄養化学	栄養素の機能に関する研究、特に長期にわたる栄養素摂取のアンバランスやインバランスに関連した慢性的な健康障害の機序を明らかにし、ヒト個人の最適な栄養量を提示し、より高い健康をめざした食生活を創造するための研究を行っている。①ビタミンの新しい生理機能に関する研究 ②栄養状態による代謝変動機構の解明に関する研究 ③尿を使用する新しい栄養指標の創生
教授	寄本 明 ヨリモト アキラ	運動生理学	高温環境下の運動時における呼吸、循環、体液および体温調節機能を明らかにし、適切な温熱指標と暑熱障害予防措置について研究している。他方、中高年者の生活活動強度やエネルギー消費量を調査し、習慣的な運動が生活習慣病危険因子に及ぼす影響およびその運動効果を予防医学的な視点から科学的に検証している。
准教授	浦部 貴美子 ウラベ キミコ	食品衛生学 食品加工・保蔵学	人は古くから、経験的な知恵に基づいた食素材を利用している。一方では、有益性を保持していると推測されるものの低・未利用の食資源もある。これらのものから、人の生活に生かす、あるいは健康に役立つような働き、関与している成分を探索する研究を行っている。①食品微生物の生育を制御する野草由来成分の分離・同定②滋養の伝統的食資源である鮎鮎・飯を対象とした機能性に関する研究
准教授	岡本 秀己 オカモト ヒロユキ	公衆栄養学	高齢化社会を迎え、がん、心疾患、脳血管疾患、寝たきりなどが増加する中、適切な栄養や運動がこれらを予防することが実証されている。心身ともに健康で豊かな生活を送るためには、各ライフステージにおける栄養摂取や運動のあり方を周知し、自らが実践できる能力を養うことが不可欠である。そのための食教育のあり方、必要な食環境整備等を明らかとするため、①健康・栄養実態調査から問題点を明らかにし、健康増進・保持の有効な方法の検討②幼児の身体活動・栄養摂取の実態と発達の関係③高齢者に対する有効な栄養教育のあり方の検討④大学生の食生活実態と問題解決のための食育・支援のあり方の検討⑤こころと身体に障害をもつ特別支援学級児に対する「生きる力」を育む食育に関する研究などをテーマとして研究を行っている。
准教授	福渡 努 フクワタリ ツトム	栄養生化学、栄養生理学	ビタミンやアミノ酸などの栄養素とヒトの生理機能との間に成立する複雑な相互関係を解明するための研究に取り組んでいる。急激な神経伝達物質の増減が繰返されると神経伝達機能に異常が生じ、脳機能が変動をきたすため、食環境の改善によって穏やかに且つ適度な範囲内で神経伝達物質を調整することは、脳機能の保護に繋がる。どのようにアミノ酸代謝を調整すれば神経伝達物質の分泌を調整することができ、脳機能を適切な状態に保つことができるのか明らかにすることを目指している。
准教授	南 和広 ミナミ カズヒロ	運動生理学	運動による血管の機能適応について研究している。運動およびトレーニングは生体内において様々な機能・構造適応を引き起こしている。この適応は、骨や筋だけではなく血管においても同様に認められる。疾病の予防および改善、持続的運動能力の向上への応用を目指し、運動による血管適応反応の現象と機序、その評価方法について研究する。
未定		栄養教育学	急速な社会環境・生活構造の変化や健康に対する価値観が多様化した現状において、生涯を通じた健康づくりの啓発・普及のためには、小児期、青年期、壮年期、高齢期等それぞれのライフステージにおける健康（身体的・精神的）に関する諸要因の解明と教育介入を含めた合理的栄養教育法の確立が必要となる。それらを目標に、1) 幼児を対象として咀嚼能力の向上を目的とした教育介入とその効果 2) 大学生の食行動と精神的健康状態との関連 3) 高齢者の健康状況と食生活・食習慣・生活状況との関連等、生活習慣病改善指標、食行動、咀嚼能力、ストレス等をキーワードに研究を進めていく。

【人間関係論研究部門】

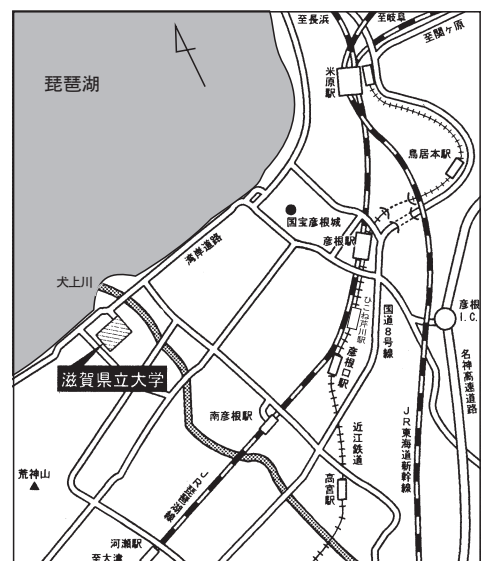
職名	担当教員	専門分野	担当科目 (前期課程)	研究内容
教授	ヨシダ イチロウ 吉田 一郎	教育学 生活指導論	学校教育・生活指導論特講	大きく言って、二つの研究課題を追及している。一つは生活指導についての歴史的、教育実践論的研究。日本の土着的教育概念である生活指導の教育学的な意義を明らかにすること、生活指導実践の課題を教育実践論の観点から明らかにすることに取り組んでいる。一つは、教師論。特に教師の専門性について、特に専門的力量形成問題について取り組んでいる。
教授	オホハシ マツユキ 大橋 松行	政治社会学 地域運動論	社会・地域変動論特講 現代生活論Ⅱ	三つのテーマについて研究を進めている。一つ目は、滋賀県を中心とした地域政治（投票行動）の研究であり、二つ目は環境問題や公共事業に関わっての住民運動、とりわけ住民投票についての研究である。そして三つ目は、「平成の大合併」後の地方自治と新しいまちづくりの研究を行っている。
教授	タケシマ ヒデコ 竹下 秀子	発達心理学	行動発達論特講 現代生活論Ⅱ	ヒトを含む霊長類の行動発達を比較し、進化的連続性やヒトの独自性を明らかにする研究を行ってきた。社会・教育・文化によって育まれるヒトの心であるが、生物学的視点を基礎に据えた研究に取り組むこと、とりわけ、乳幼児期における、姿勢運動、物の操作、コミュニケーション、遊び、模倣、自己意識などの発達連関の解明と発達支援のあり方を探ることが日下の課題である。
教授	ホソマ ヒロミチ 細馬 宏通	コミュニケーション論	比較行動論特講 現代生活論Ⅱ	大学生の学内での会話、デイケアサービスやグループホームにおける高齢者の会話、多人数で行う作業場面など、さまざまな日常場面で観察される人間の行動を、会話分析、ジェスチャー分析の立場から分析している。また、身体行動をどのように記述し、データとして扱っていくかについても研究を進めている。
准教授	マツシマ ヒデアキ 松嶋 秀明	臨床心理学 発達臨床学	行動発達論特講	人間の発達、とくに心理的な障害からの回復過程に興味がある。なかでも、これまでともすれば軽視されてきた、社会－文化－歴史的な文脈の与える影響を重視している。最近では、発達上の心理的問題の一つである非行・不登校問題に興味をもっている。そのため小・中学校におけるアクションリサーチを行っている。またこうしたテーマと関わって、質的な研究の方法論の整備にも関心がある。
准教授	ウエノ アリ 上野 有理	比較認知発達科学	比較行動論特講	「他の動物と同様、ヒトは進化の産物である」という視点に基づいてヒトの行動を理解するため、ヒトを含めた霊長類数種の行動比較をおこなってきた。とくに食行動の発達に関心をもち、味覚や、食事場面における母子間コミュニケーション、他者の情動理解の発達をテーマに研究を進めている。離乳期から就学前の時期に焦点をあてており、乳幼児の養育支援のあり方についても検討していきたいと考えている。
准教授	シノハラ タケシ 篠原 岳司	教育行政学 教育経営学	学校教育・生徒指導論特講	教育実践と学校組織改革の実践論として知られる「分散型リーダーシップ」の理論を用いた日米の教育制度および学校組織の実証研究。これまでに、教育と学習の制度および組織の形成と変容の過程を明らかにするため、米国の大都市学区、北海道の某市町、福井県内の小中学校に入り調査を進めてきた。2. 教師の授業実践や学校組織改革を支援する教育行政の研究。具体的には、都道府県教委ないし教育センターが実施する教育研修事業や指導主事訪問の実態に着目している。
助教	ナカムラ ヨシタカ 中村 好孝	社会学、福祉社会学	社会・地域変動論特講	1. 戦後アメリカの社会学者ミルズを中心とした社会学史の研究。学者でない人に対して社会学は何をできるのだろうか。2. 現代社会の臨床的な諸問題の調査研究。これまでは社会的ひきこもりのフィールドワークを中心に調査を行ってきた。3. 精神障害者福祉の支援現場との関わりから福祉について学んでいる。
助教	マルヤマ マサキ 丸山 真央	地域・都市社会学 政治社会学 社会調査	比較社会文化論特講	開発主義国家の再編とネオリベリズムの時代の日本の地域・都市ガバナンスをテーマとして、主に社会学の視点と方法で、以下の課題を追及している。①市町村合併・自治体改革と地域ガバナンス。②グローバルゼーションと日本都市の構造再編。③ネオリベラル・ガバナンスと社会運動／市民活動、特にNPOなど市民社会組織の関係。④社会調査データによるネオリベリズムのイデオロギー分析。
助教	キムラ ユウカ 木村 裕	教育学 教育方法学	学校教育・生活指導論特講	現在の主たる研究課題は、学校教育の場における開発教育およびグローバル教育のカリキュラム編成および授業のあり方に関するものである。そこでは、理論が実践にどのように反映されるのか、また、実践の様相をふまえると理論はどのように修正できるのかというかたちで、理論と実践の往還を意識しながら研究を進めている。 さらに、「目標－内容－方法－評価」の一貫性を意識した授業づくりのあり方についての研究（学校現場の先生方との共同研究も含む）や学力調査の分析なども行っている。



滋賀県立大学

〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町2500
TEL0749-28-8216・8217 FAX0749-28-8472
ホームページアドレス <http://www.usp.ac.jp/>
E-mail:nyushi@office.usp.ac.jp

《略図》



■ JR南彦根駅西口より
バス「県立大学線」で約13分